

## ふるさと心理の構造分析 (1)

武 田 圭 太

### 問 題

長期にわたる人口の過疎過密化が進行したことによって生じた国土全体の人口分布の不均衡が未だに常態化したままであることから、最近、地方行政区域の一部が近いうちに消滅してしまうという示唆が広く関心を集めている(増田, 2014)。余所のまちへ移住した地方出身者が、ふるさとを無くしてしまうことになるかもしれない。実際、無くなってしまったふるさとを再び蘇らせようとする人たちの行動が報じられている(西日本新聞, 2015a, 2015b, 2015c, 2015d)。

過疎過密の解消をめざしてこれまで多くの経済・社会政策が適用されてきたが、人の始原とも考えられるふるさとの誘因を解明しなければ根本的な問題解決にはならないと思われる。しかし、ふるさと心理に関する科学的な探究はほとんどみられない。

そこで本稿では、ふるさとの心理構造を探索するため、武田(2015)が試作したふるさと心象尺度の下位尺度を構成概念とする多重指標概念図式について検討する。当該のふるさと心象尺度は男女別に考案されたので、ここでも個別に分析する。

男性について仮定した構成概念は、「家族」の因子、「美しい自然環境」の因子、「共同体」の因子である。これらの構成概念は、ふるさとに関する心象項目を因子分析して得た

尺度の主因子である(武田, 2015)。「家族」の因子は、「ふるさとには、実家がある」「ふるさとには、親が住んでいる」「ふるさとには、墓がある」など、家族に関する知覚をあらわしている。「美しい自然環境」の因子は、「ふるさとは、山や川や海が美しいところである」「ふるさとは、水や空気がきれいなところである」など、ふるさとの自然環境は美しいという心象を想定している。「共同体」の因子は、「ふるさとには、面倒見のいい人たちが住んでいる」「ふるさとには、人情味のある人たちが住んでいる」など、ふるさとを共同体と知覚し、そこに住む人たちの紋切り型の性格特性を示している。そして、この3つの構成概念に影響されると仮定したのがふるさと定住願望である。3つの構成概念がふるさと定住願望を高めるように作用すると予測される。

女性についても男性と同じ3つの構成概念を仮定した。ただし、因子負荷量が男性とは異なり寄与率にも差異がみられるため、男女別に検討する。

ふるさとに関する「家族」「美しい自然環境」「共同体」の個別心象は、男女ともにふるさとでの定住願望と関係することが報告されている(武田, 2008, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015)ので、これら4変数間の関係性を図式化することが本稿の目的である。

## 方 法

**調査対象** 原調査は、愛知県内の私立T大学経営情報学部1～2年生、私立A大学文学部2～4年生、T市青年団員、G市保健センター利用者、G市勤労青少年ホーム利用者、G市民会館職員およびその家族、T市勤労青少年ホーム利用者を対象に行った。

**調査方法** 原調査は、構造化された質問紙法によって、私立T大学経営情報学部1～2年生31人、私立A大学文学部2～4年生69人、T市青年団員114人、G市保健センター利用者100人、G市勤労青少年ホーム利用者81人、G市民会館職員およびその家族35人、T市勤労青少年ホーム利用者113人、合計543人に調査票を配布した。そのうち、回答の一部が無記入など不備だった調査票や、愛知県以外の出身者の回答83票を除いて、460の有効票を回収した（配布票に対する有効回収率84.71%）。

調査票は、私立T大学経営情報学部1～2年生、私立A大学文学部2～4年生には、授業中に配布し回答してもらい回収した。T市青年団員には、T市教育委員会生涯学習課の職員とT市青年団員を介して調査票が配布され回収された。G市保健センター利用者、G市勤労青少年ホーム利用者、G市民会館職員およびその家族については、それぞれの職員を介して調査票を配布し回収してもらった。G市保健センターでは乳幼児の育児講習等を受講する母親、また、G市勤労青少年ホームでは親睦を深めながら余暇活動をしているクラブやサークルの会員が調査対象だった。さらに、G市民会館の職員とその家族からも回答を得た。T市勤労青少年ホーム利用者には、T市職員を介して講座の前後に調査票が配布され回収された。

**調査時期** 原調査は、愛知県内の私立T大学経営情報学部1～2年生と私立A大学文学部2～4年生には2001（平成13）年11月、

T市青年団員には2002（平成14）年6～9月、G市保健センター利用者とG市勤労青少年ホーム利用者とG市民会館職員およびその家族とT市勤労青少年ホーム利用者には2003（平成15）年10～11月に実施した。

**分析手続** 検討する変数は、①ふるさと心象と②ふるさとでの定住願望である。

ふるさと心象は、ふるさとから連想する人やものごとなどを自由記述したことを集め、そのなかから、ふるさとを主題とする既存の論説を参考に選定した25項目（武田，2008）に対して、「1＝そう思う／2＝どちらかといえばそう思う／3＝どちらかといえばそうは思わない／4＝そうは思わない」のなかから1つ選んでもらい、分析するときには「4＝そう思う／3＝どちらかといえばそう思う／…／1＝そうは思わない」と逆転させた。

ふるさとでの定住願望は、「あなたは、ふるさとに住みたいですか」に対して、「1＝ふるさとから離れずにずっと住みたい／2＝ふるさとからしばらく離れて暮らした後で、戻ってきてずっと住みたい／3＝ふるさとから離れて暮らしながら、ときどき戻ってきたい／4＝ふるさとから離れたところで、戻らずにずっと暮らしたい」のなかから1つ選んでもらい、分析するときには「4＝ふるさとから離れずにずっと住みたい／3＝ふるさとからしばらく離れて暮らした後で、戻ってきてずっと住みたい／…／1＝ふるさとから離れたところで、戻らずにずっと暮らしたい」と逆転させた。

## 結果と考察

**ふるさとと心理の構造** 図1は、男性のふるさと心理構造を3つの構成概念、「家族」の因子、「美しい自然環境」の因子、「共同体」の因子で探索的因子分析した結果である。この概念図式は、0.1%水準ですべて有意な標

準化推定値で成立しているが、適合度指標 (Goodness of Fit Index: GFI) = 0.894、修正適合度指標 (Adjusted Goodness of Fit Index: AGFI) = 0.817、比較適合度指標 (Comparative Fit Index: CFI) = 0.904、RMSEA (Root Mean

Square Error of Approximation) = 0.103 と十分な適合を示していない。したがって、図1の概念図式は参考資料に留め、考察の対象から除く。

図2は、男性と同様に、女性のふるさと心

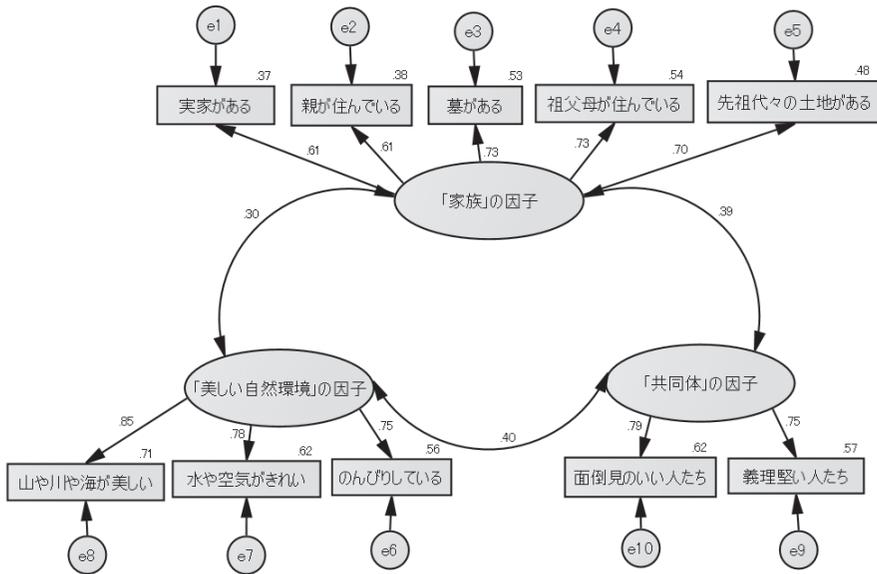


図1 男性のふるさと心理構造 (n=136)

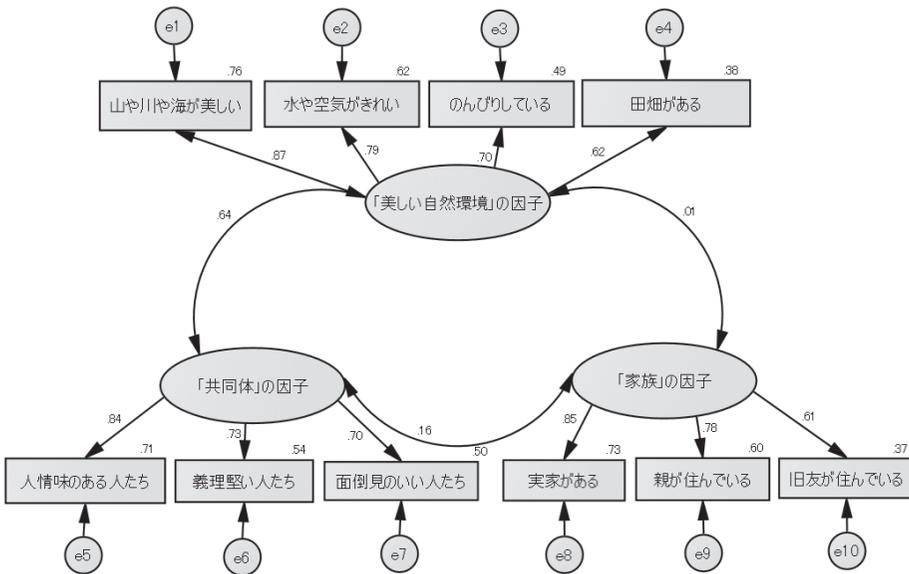


図2 女性のふるさと心理構造 (n=324)

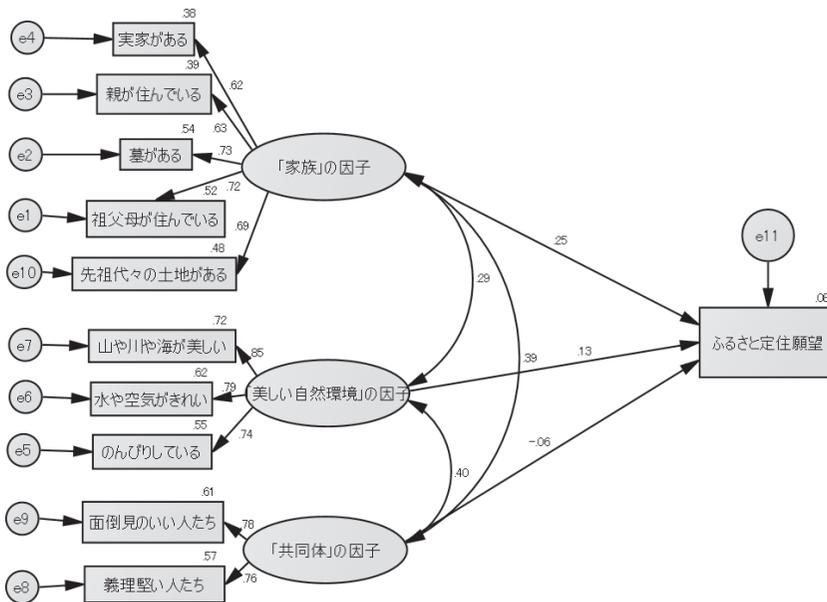


図3 男性のふるさと定住願望の心理構造 (n=136)

理構造を探索的因子分析した結果である。この概念図式は0.1%水準ですべて有意な標準化推定値で成立し、適合度も、 $GFI=0.960$ 、 $AGFI=0.930$ 、 $CFI=0.970$ 、 $RMSEA=0.060$ と概ね良好な数値が得られた。「家族」の因子から「実家がある」「親が住んでいる」への係数が高いことから、ふるさととの家族という心象は、そこに実家があり親が住んでいるという知覚に強く影響したと考えられる。また、「家族」の因子は、「美しい自然環境」の因子や「共同体」の因子とは無相関であることから、女性のふるさととの心理構造は、家族とその家族をとりまく社会環境・自然環境という構成体が推察される。

**定住願望の心理構造** 図3は、図1の概念図式にふるさと定住願望を加えた男性のふるさと心理構造を共分散構造分析(Covariance Structure Analysis: CSA)した結果である(豊田, 2007)。この概念図式は、0.1%水準ですべて有意な標準化推定値で成立しているが、適合度は、 $GFI=0.890$ 、 $AGFI=0.813$ 、 $CFI=0.895$ 、 $RMSEA=0.098$ と不十分な数値だっ

た。図1と同様に、図3も参考資料として扱うことにし、ここでは考察しない。

図4は、男性と同様に、図2の概念図式にふるさと定住願望を加えた女性のふるさと心理構造を共分散構造分析した結果である。この概念図式は、0.1%水準ですべて有意な標準化推定値で成立し、そのうえ適合度も、 $GFI=0.956$ 、 $AGFI=0.926$ 、 $CFI=0.966$ 、 $RMSEA=0.059$ と概ね満足できる数値を示した。「家族」の因子からふるさと定住願望への係数が高いことから、ふるさとに住む家族の心象が、ふるさとでの定住願望を強めたと思われる。その一方、美しいふるさとという心象や共同体から思い浮かべる情緒的な関係性の心象は、女性のふるさと定住願望に影響しなかった。

本稿では、ふるさととの心理構造を4つの構成概念で仮定し、男女別に概念図式を検討したが、男性については有意な適合が示されなかった。適合度を高めるには、標本数を増やすことや、構成概念数を増減させてみるなど、数量分析を工夫する必要があるだろ

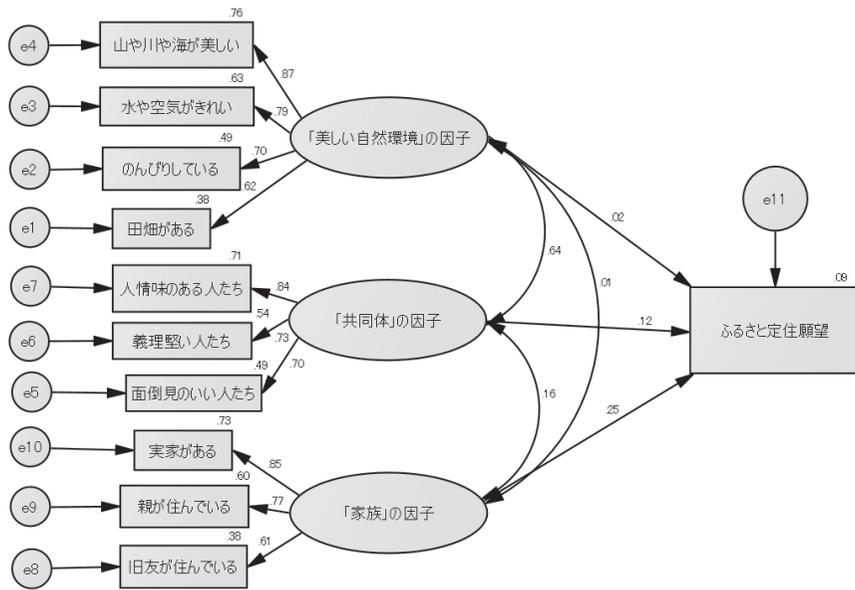


図4 女性のふるさとと定住願望の心理構造 (n=324)

う。しかし、ふるさとと心理に関する定性的な男女差が、構成概念図式の適合度と関係しているかもしれない。男性に比べて女性は、ふるさととの心象とふるさとと定住願望とがより強く相関しているとも考えられるだろう。

ともあれ、定量化しにくいふるさとと心理を客観的に論議するため、今回のような概念図式の探索的な検討は、今後も継続して取り組んでいきたい。その際、ふるさととの心象以外に、ふるさととの有無、ふるさととの印象、親へ報恩する意志、老親を世話する意志、親と同居する意志などの要因を取り入れたふるさとと心理構造を仮定し、構成概念間の経路の設定を工夫して、ふるさとと心理を構成する概念全体の適合度を高める必要がある。

特に、女性の場合、ふるさととの心象は、実家やそこに住む親を想起させることから、親との関係性の認知が一定の影響をもつかもしれない。その影響力は、婚姻状態とも関係すると思われる。

引用文献

増田寛也 編著 2014 『地方消滅—東京一極集中が招く人口急減—』中央公論新社  
 武田圭太 2008 『ふるさととの誘因』学文社  
 武田圭太 2011 「女性にとっての“ふるさと”と定住願望(1)」『愛知大学総合郷土研究所紀要』56, 39-49.  
 武田圭太 2012 「女性にとっての“ふるさと”と定住願望(2)」『愛知大学総合郷土研究所紀要』57, 23-31.  
 武田圭太 2013 「女性にとっての“ふるさと”と定住願望(3)」『愛知大学総合郷土研究所紀要』58, 23-33.  
 武田圭太 2014 「女性にとっての“ふるさと”と定住願望(4)」『愛知大学総合郷土研究所紀要』59, 55-62.  
 武田圭太 2015 「女性にとっての“ふるさと”と定住願望(5)」『愛知大学総合郷土研究所紀要』60, 51-58.  
 豊田秀樹 編著 2007 『共分散構造分析 [Amos 編]—構造方程式モデリング—』東京図書  
 『西日本新聞』2015a (平成27)年8月25日付「ふるさととの守り人(1)」  
 『西日本新聞』2015b (平成27)年8月26日付「ふるさととの守り人(2)」  
 『西日本新聞』2015c (平成27)年8月27日付「ふるさととの守り人(3)」  
 『西日本新聞』2015d (平成27)年8月28日付「ふるさととの守り人 (4完)」